第４回　国際シンポジウム

日本女性の捉えたフランス近代・女性

長谷川　イザベル

Japanese Women's View on French Women in Modern Society

Isabelle Silberschlag-Hasegawa

Parler de modernisation, c'est inclure dans le vaste mouvement des idées inspirées par la Révolution française, celui qui, du 19e siècle à nos jours, porte les femmes à revendiquer l'égalité des droits et le respect de leur dignité. Dès 1789, les Françaises ont lutté pour leur libération contre l'Eglise catholique et contre le pouvoir patriarcal tel qu'il s'exprime dans le Code Napoléon de 1804. Les Japonaises, au début du 20e siècle, se sont davantage inspirées des mouvements féministes anglo-saxons qu'elles sentaient plus proces de leurs préoccupations. A l'image de Yosano Akiko, lors de son voyage en Europe en 1912, elles comprenaient mal la situation du féminisme français. Ce n'est que dans une période récente, lors du vigoureux mouvement contestataire des années 70, qui a bouleversé la société française, que les Japonaises se sont tournées avec intérêt vers le nouveau féminisme français.

男女の平等を抜きにして近代化を論じることはできない。男女の平等の実現をめざす闘いにおいて日仏の女性の間に接点がなかったかどうか。本論では、この問題を取りあげてみたい。

もう二十年以上も前の話しだが、フランス人だからというので、私はよく道で見つめられたり、話しかけられたりした。こうして私の国の女性について日本女性がどんなイメージを抱いているのか少しずつ分かってきた。そのイメージとは、大変好意的で美化しすぎていると思われるようなものだった。現実を知っていた私には、なぜこのようなイメージが生まれたのか不思議でならなかった。日本女性にとってフランス女性とは、一言でいって「パリジェンヌ」だった。服装に関して色彩のセンスが良く、コーディネートが巧みで、「ちょっとした工夫で」シックに着こなす、エレガントな女性というのである。私はといえば、シンプルなジーンズを好んでいたフランスの女子学生よりも日本の女子学生の方がはるかにオシャレで、自分の外見にこだわっているように感じていた。日本では当時、ブランド品をもてはやす風潮が生まれており、日本女性の友人たちは、私もヴィトンのハンドバッグか何かを持っていると信じ切っていた。大変な勘違いで、

私は来日するまで、そんな名前を聞いたことさえなかった。

フランスのブルジョワが独占的に愛用していたブランド品に対する日本女性のこのような過度とも思われる関心の強さに、私はしばしば驚かされたものだった。そればかりか、ヴェルサイユ宮殿とか、マリー・アントワネットを中心に繰り広げられたきらびやかな宮廷生活といったものへの憧れの強さも、私にはとても意外だった。また、女主人が男性の讃美者たちに囲まれているサロンや、その他の社交生活についても、よく訊かれた。その際にバルザック、スタンダール、フローベール、モーパッサン、デュマといった作家の名前が次々と口から飛び出すのを聞いて私は、フランス女性よりも日本女性の方が19世紀フランス文学に詳しいのでは、とつい思ってしまった。いずれにしても、フランスの小説に登場するロマンチックな恋に生きるヒロインに日本女性が魅せられていたことは疑いなかった。このように日本女性から見たフランス女性は、消え去りつつある過去へのノスタルジーに彩られた、幻想の世界に属していたといってよい。

このことは私にとって、決して不愉快ではなかった。けれども、私があとにした、そして日本の学生に説明しなければならなかったフランスの現実が、このように美化されたイメージのせいで見えなくなってしまったのは実に残念だった。フランスには、地味な一般家庭の主婦が、勤労女性が、女子学生がいた。歪んだ女性観に縛られていた女性が、そして男女の平等を実現しようと粘り強く闘う女性がいたのである。

1．日本人フェミニストたちのまなざし

1980年代初頭、私はフランス女性の歴史に関心を寄せる日本女性の一グループから声を掛けられた。「日仏女性資料センター」の名の下に、日仏両国の女性の歴史を研究することを目的に結成されたグループで、現在では「日仏女性研究学会」と改称し、事務局を東京の日仏会館に置いて活動を続けている。ところで、このグループのオリジナルな活動をよく理解するには、結成に至るプロセスに目くばりする必要がある。

1968年前後、アメリカやヨーロッパにおいてと同様、日本でも学生運動が盛り上がった。しかし日本女性にとって、成果は必ずしも満足のいくものではなかった。女性に対する差別は家庭に、職場にそっくりそのまま残っていた。そのために70年代に入るとすぐに、女性解放運動が大きく広がることになった。フランス女性が「MLF（女性解放運動）」を組織したのと同様に、日本女性も「ウーマン・リブ」の運動を活発に展開した。

日本では、「ウーマン・リブ」の過激な活動は大多数の女性の支持を得るには至らなかった。しかし、折から無数の女性団体またはフェミニスト団体が誕生。そして国会議員の市川房枝や田中寿美子を中心にメディア機関や官庁、政治の世界におけるさまざまな形の女性差別と徹底的に闘った。以上のような圧力に屈して日本政府は1970年、女性の要求を受け容れて「国立女性教育センター」を開設した。その後、1975年には国連が「女性の権利年」を宣言。これに力づけられて、自らの生活条件の改善を願う日本女性がより多く女性解放の運動に動員されることになった。

このような時代の雰囲気の中で、日本でも諸外国と同様に「ウーマン・スタディーズ」が発達

したが、その一環として「日仏女性資料センター」の設立を位置づけることができる。60年代にフランス文学を学んだ女性ジャーナリスト、編集者、左翼活動家、弁護士、大学教授は、フランス社会の最近の著しい変化に興味を抱いたが、信用の置ける関連資料がいっさい欠けていることに気づいた。そして同時に、この資料不足が他の分野でもさまざまな誤解を生んでいたことを残念に思った。深刻化する日仏間の経済摩擦を背景に、フランスの政府高官が日本の家屋を「ウサギ小屋」と呼んだり、受験地獄を皮肉ったりした。また、日本女性を「女奴隷」だとして皮肉ったりしたものである。このような日仏両国間の誤解を取り除き、相互理解を深める目的で、「日仏女性資料センター」が設立されたのだった。

2．フランスに対する日本人フェミニストの関心

「日仏女性資料センター」に結集した日本女性たちは、1947年から女子に門戸を開いた新制大学でフランス文学のハイレベルな教育を受けた。60年代、70年代に卒業したあと、就職したり、結婚したりと進路は分かれても皆、日仏の文化交流に貢献したいと念じた。彼女たちは、若い頃に大学でフランス文学を選んだことにどんな意味があったか私に説明してくれた。当時の日本文学には全然興味が湧かなかった。自由と行動を追究しようとしている自分たちのモデルをそこに見つけるのは難しかったから、と説明する女性もいた。彼女たちがフランスの実存主義に影響されていたことは明らかである。実存主義は「自由」と「政治参加（アンガージュマン）」を説くことによって、個人と社会の関係がいかにあるべきかについての思索にヒントを与えた。日本女性は、戦後の新しい社会の中でどのような役割を果たすべきか真剣に模索していた。ボーヴォワールの『第二の性』が1949年にフランスで刊行されると、日本で早くも1953年に翻訳が出て、ベストセラーになった。全巻を読破した日本女性はきっと少なかったことだろう。それでも、のちに彼女が来日すると、まるで有名な映画スターのように熱狂的な歓迎を受けた。この事が日本のインテリ女性に対し、自分たちの前には新しい可能性が広がっていると信じ込ませたことは疑いを容れない。その一方で、より多くの日本女性は、結婚せずに継続的な性的関係を持つというサルトルとボーヴォワールの大胆な試みに注目した。「サルトルとボーヴォワールの実存主義が大流行していた。私自身も卒論のテーマに『第二の性』を選んだ」。「プルースト、ジイド、カミュを選んだあとでシモーヌ・ド・ボーヴォワールを発見した。女性にも自立する権利が要求できることを私ははじめて理解した」（傍点、筆者）。女性のアイデンティティの追究というテーマは、他のメンバーの発言にも共通して見られる。皆、戦後の日本社会の中で自らの女性としてのアイデンティティをいかに構築すべきか、どのような役割を演じるべきかと思い悩んだという。

日仏両国の文化交流を推進しようと努めることになる若き日のこの会のメンバーにとって、女性の実存的な問題だけが関心の的なのではなかった。一般の日本人女性が抱いていたフランス女性のイメージを部分的に共有していた一部のメンバーは、華やかな「パリジェンヌ」の生き方に対する憧れもあった、と付け加えた。そしてフランス文学を学ぶと、今度は実際にフランスを訪問したくてたまらなくなった。幸運にもフランス旅行を実現できた日本女性が、フランスで受けた印象はさまざまだった。女性の日常生活が自分のそれや母親のそれとあまり異ならないのを発

見して驚いたと語る日本女性がいた。それに対して別の女性は、フランス女性の行動が自由であり、さまざまな分野に進出して男性と肩を並べて活躍していること、社会保障制度が進んでいるばかりか、それをさらに改善しようとする努力が払われていることに目を見張った。

3．知られざるフランス・フェミニズム

「日仏女性資料センター」による過去の20年間の刊行物のリストを見ると、フランスの女性の権利、家族法、母性、労働、フェミニズム、女性史に関する研究が目につく。つまり、フランス女性の実態に対する関心の高さがそこに窺えるのである。このことは注目に値する。というのは、日本のフェミニストたちはこれまで、フランスのフェミニズムにはほとんど無関心だったからだ。20世紀初頭以来の日本のフェミニズムの歴史を論じた概説書を開いても、そこにはフランス・フェミニズムに関する記述がほとんど見られない。唯一登場するのは、シモーヌ・ド・ボーヴォワールである。女性解放に関し、日本のフェミニストたちは伝統的にアングロ・サクソンの世界に注目してきた。1872年における津田梅子一行の有名なアメリカ滞在のエピソード。新しい家族概念の目覚めにつながるプロテスタント宣教師による教育の発達。これらの事実が証明しているように、明治以来日本女性はアングロ・サクソンの生活様式を通じて西洋式の生き方について考え、またそのあるものを採り入れてきた。雑誌『青鞜』と与謝野晶子、平塚雷鳥、山川菊栄を中心に展開した20世紀初頭の日本フェミニズムの最初の運動は、プロテスタントのフェミニストたち、たとえばエレン・ケイの主張からインスピレーションを得ている。それに対し、フランス・フェミニズムはまったく知られていなかったわけではないが、ほとんど注意を惹かなかったのである。

大正時代、ごく一部だが裕福な日本女性がヨーロッパ旅行に出かけ、「パリジェンヌ」の生活を直接目にすることができた。こうした日本女性の一人、「新しい女性」のモデルを求めていた与謝野晶子はどのような印象を受けただろうか。彼女は1912年、ヨーロッパに向けて発ち、主にパリとロンドンを訪問した。それは彼女にとって、フランス女性とイギリス女性を比較する絶好の機会となった。晶子がロンドンに着いたとき、そこではエムライン・パンカーストの率いる婦人参政権運動が盛り上がり、急進化していた。この運動が、のちに1928年の選挙権獲得につながるのである。それにひきかえ、フランス・フェミニズムは晶子の目に、生彩を欠いているように映った。彼女は自らのこうした感想を当時のフランスの新聞に記し、フランス・フェミニズムは30年も遅れていると評した。この記事をたまたま目にしたフランス・フェミニズムのリーダーの一人、セシル・ブランシュヴィクは不快感を隠さず、それなら婦人参政権運動を支持する数千名のフランス女性の名簿を送ってやる、と反論した。余談ながら、このやりとりで面白いのは、あのフランス女性とイギリス女性の対照的なイメージ、すなわち、鉄幹と一緒に暮らしていたモンマルトルで見かけたようなエレガントだが軽薄なフランス女性、真面目だがあまり女性らしくないイギリス女性というイメージを晶子がここで用いている点である。いずれにしても、20世紀初頭のフランス・フェミニズムが穏健であったのは、晶子の指摘通りで、ときどき暴走した19世紀のことを思うと、隔世の感があるのは否めない。その理由を少し説明する必要がある。ちなみに

「女性の目覚め」とか「新しい女性」といった表現を使っている与謝野晶子の思想的立場は、19世紀以後の合理主義的傾向の強いフェミニストのそれよりも、ロマン主義的で情熱的なサン＝シモン主義者の女性のそれに近いといえよう。

4．フランス・フェミニズムの現実

大革命と人権宣言の国、「ギャラントリー」や「生きる歓び」でいっぱいの国フランス。このような明るいイメージとは裏腹に、19世紀フランスの女性の生活は1804年発布のナポレオン法典に縛られたままで、決してバラ色ではなかった。革命家たちが1793年、女性を公的な議論の場から締め出すと、今度はナポレオン法典が彼女たちを夫の権威に絶対服従させ、彼女たちから民事上の行為能力を奪った。そして一家の財産を管理し、家族に関するすべての重要な事柄を決定する権利を夫だけに与えた。なぜ、こんな古い話を持ち出すのかと問われたら、ナポレオン法典がフランス女性の生活にどれほど大きな影を落としたかいくら強調してもし足りないからだ、と答えよう。たとえば1965年まで、夫は法律に従って、妻が職業を営むことに反対することができたのである。ナポレオン法典の成立事情やその実効性については議論が分かれる。しかし、ここではそれらを紹介することは割愛して、ただ次のように述べておきたい。フランス女性の日常は、ナポレオン法典から受ける印象ほど厳しいものでは必ずしもなかったけれども、フランス女性の歴史は一言でいって、ナポレオン法典の廃棄をめざした粘り強い闘いであった、と。そして、それが完全に廃棄されたのは1975年、つまり、ごく最近のことである、と付け加えよう。

19世紀フランス・フェミニズムの歴史を理解する上で、もう一つ、フランス史に特有の事情として宗教の問題を忘れてはなるまい。フランスがカトリックの国であったこと、そして今でもそうであり続けていること、また、長い間国家とカトリック教会という二つの権力が対立し、闘ってきたことは周知の事実である。ところが、これらの権力の緊張関係がフランス女性の生活とその変化に重大な結果をもたらしたことは、それほど知られていない。「王政復古」と呼ばれる時代から、カトリックの聖職者たちは社会に対する影響力を取り戻す目的で、未来の妻、未来の母親である女子の教育に力を入れた。19世紀のほぼ全体にわたって女子、とりわけエリート層の女子は名門修道院で、中・下層の女子は田舎の小修道院で教育を受けた。それに対して男子は、宗教色のない、どちらかといえば反教権主義の国立リセに通った。奇妙にも教育がこのように二分されていたことから、数々の問題が生じた。まず、夫婦間の不和を挙げることができる。夫と妻があまりにも異質な教育を受けた結果、両者のコミュニケーションが困難になったことである。確かに、今日と違って、かつては夫婦の親密さというものがそれほど求められていなかったけれども。19世紀のフランス女性の自伝を読むと、開明的で教養のあるブルジョワ女性が、ナポレオン法典とキリスト教道徳にもとづいて反教権主義の夫に服従しなければならず、大いに苦悩したことがひしひしと伝わってくる。

カトリック教育の受け止め方の違いにより、女性が二つのカテゴリーに分断されたことも指摘しよう。教会によって保守的な女性モデルを心の奥底に植え付けられた多数派の女性は、実際、のちに「フェミニスト」と呼ばれる少数派の女性の権利要求運動を理解することができなかった。

「反逆者」のレッテルを貼られた後者の女性は、自らの女性としての境遇を受け容れることを拒んだ。そして女性であることを恥じながら、早くもフランス革命の最中に声を上げ、のちにはナポレオン法典と教会の双方を批判するのである。

こうして1830年にサン＝シモン主義者の女性が、1848年に「ファム・アンラジェ（過激な女性）」が、そして1871年に「ペトロルーズ（パリ・コミューンのとき、石油をまいて火を放った女性闘士）」が出現することになる。概して民衆層出身の彼女たちの要求は、時代によって色合いを異にした。1830年にはロマン主義的で、すでに恋愛結婚を、さらには正式に結婚をしない自由恋愛をする権利を要求。1848年と1871年には社会的または社会主義的傾向を示し、自らの労働によって生きる権利と選挙権の獲得をめざして闘った。彼女たちの運動は、ブルジョワの男性ばかりか女性の間にもパニックを惹き起こし、激しい拒絶反応に出会う。彼女たち自身も、ブルジョワのジャーナリストから「人類の屑」と呼ばれ、作家から「追放刑に値する飢えた復讐の女神」として描かれた。

5．19世紀末フランス・フェミニズムの隠れた顔

日本のフェミニズムは第一次世界大戦の前夜、有名な雑誌『青鞜』を中心に発達し、西洋の女性解放思想を受け容れつつあった。「ベル・エポック」のフランス・フェミニズムには確かに、それ以前のジョルジュ・サンド、そしてそれ以後のボーヴォワールのような国際的スケールのフェミニストが出ていない。それでは当時、フランスのフェミニストたちは活動を止めていたのかというと、その逆であった。第三共和政の到来以後、フランス社会は「19世紀」から抜け出て、義務教育の普及と都市の中産階級のブルジョワ化とともに近代に突入した。このことは当然、女性の生活にも影響を及ぼすことになる。とりわけブルジョワ女性は働くことを望み、公的な生活によりいっそう参加したがる。やがて日本にまで波及してくる世界的運動がこうして始まったのである。

1870年、ナポレオン三世の失脚。1914年、第一次世界大戦の勃発。これら二つの重大事件の間の時期に、高度の教育を受けていた、そして文芸サークルや政治サークルに出入りしていたブルジョワの良家のお嬢さんたちが活動を開始する。女性解放のための大々的なキャンペーンを組織し、権利の平等をはじめとしてナポレオン法典の改正、選挙権の獲得、女性の労働条件の改善など、多様な課題と取り組む。ちなみに、これらの課題は皆、同時代の日本のフェミニストたちがおそらく無関心ではいられないものばかりであった。しかし、これらフランス女性の名前は、彼女たちの効果的で粘り強い活動の実態とともに歴史からほとんど消し去られてしまった。そのような女性の中で何人かの名前を挙げてみよう。ナポレオン法典における男女の権利の不平等を是正しようとして闘ったマリア・ドレーム。女性だけによって書かれた最初の上質の日刊紙を創刊したマルグリット・デュラン。同紙の女性ジャーナリストたちはドレフュスを擁護した。婦人参政権論者のユベルチーヌ・オークレールとセシル・ブランシュヴィク。女子の性教育のために力を尽したマドレーヌ・ペルチエ・・・。

以上の女性にはいくつかの共通点があった。ある程度の財産と、多くの有力な知人関係に恵ま

れていたこと。スキャンダルを起こしたことがなく、どちらかといえば大人しく生きてきたこと。最後に、プラグマチックだったこと、すなわち派手さよりも効率性を追求し、マリア・ドレームが「プチ・パ（小股）の政策」と呼んだものを実践したことである。日本のフェミニストたちにとっても、望ましいと思える戦略ではないだろうか。「ベル・エポック」のフランスのフェミニストたちのこうした慎重さがおそらく、彼女たちの存在が忘れ去られ、その功績が無視されてきたことの主たる原因だと見られる。

6．正しく評価されないベル・エポックのフランス・フェミニズム

すでに述べたように、フランス女性は19世紀、諸々の革命に参加したが、その都度、恐れられ、厳しく罰せられ、追放された。パリ・コミューンの内戦で無政府主義者のルイーズ・ミシェルが人びとを震え上がらせると、彼女の名前を元にして動詞が作られたほどである。ルイーズミシュレ（ルイーズ・ミシェルのやったことをする）というのがそれで、社会秩序を乱すことを意味した。

共和主義者のフェミニストたちが権利の平等を求めて闘ったのは、このように極度に緊張した国内情勢の下であった。彼女たちはそこで、この目的に合わせて次のような戦略を練り上げた。人びとに恐怖を与えることを止める。新聞を通して議員や政党の幹部に合法的に圧力をかける。女性に彼女たちの権利を教える。可能な限り、教会との争いを再燃させない。女性が選挙権を獲得したら、第三共和政を支持することを期待して、大勢の女性を味方につけるよう努める。以上が当時のフランス・フェミニズムの戦略だった。

フェミニストたちは真面目で合法的に振る舞ったために、外国への影響力は大きくなかった。しかし、外国のフェミニストたちからほとんど無視された理由は、それだけではない。アングロ・サクソンや日本のフェミニストたちが関心を寄せていた問題、すなわち母性の役割という問題に関し、曖昧な態度を取り続けたせいでもあった。ここで手短かに、日本での母性論争のあらましを紹介しておこう。与謝野晶子の主張は、女性は完全に自立し、自由な個人としてすべてを選択すべきであり、母性も選択肢の一つだから、それを選択したら出産と子育てを含めて母親としての責任を全うしなければならないというもの。このような晶子の考え方に、平塚雷鳥は次のように反論する。あなたの考え方は完全に理想主義的で、むしろ母性は社会的な役割なのだから、母親となることによって国力の増強に貢献しなければならない。したがって、国家が母親の、とりわけ貧しい母親の援助をするのは当然である、と。すると山川菊栄が論争に加わり、社会主義革命が必要だと訴える。最後にもう一人のフェミニスト、山田ワカが「良妻賢母」の理想は永遠に有効であり、それを現代風にアレンジするだけでよいといって、伝統的な立場を表明する。これらの主張の中で、その後数十年にわたり優勢だったのは最後の主張であり、日本女性は依然として、伝統的な家族観に執着していた。もちろん、検閲や政府による圧力を考慮する必要があるが。

フランスのフェミニストたちの間でも、両性の平等あるいは差違、労働と家庭の両立、自由それとも福祉国家といった問題が論じられた。すべて、フランス革命以来提起され続けている、今

日でも意味のある問題ばかりである。しかし、「ベル・エポック」のフランスにはカトリック女性の勢力という重大な要素があったことに注意しなければならない。19世紀末から1930年代まで、カトリック女性であり同時にフェミニストであることは、実に困難だった。プロテスタント諸国と異なり、フランスにおいてそれはほとんど解決不可能な矛盾だったのである。簡潔にいって、カトリック女性は家族や母性をすべてに優先させるという意味で、山田ワカや平塚雷鳥の立場に近かった。ただし、教会を支持しない共和主義の政府の援助を必ずしも求めたがらなかったが。一方、フェミニストを自任する女性たちは当然、反教権主義者であり、共和主義者だった。実際は、彼女たちの間で母性の役割をめぐり意見が分かれていたが、母性の保護を声を大にして訴えることによりカトリック女性に接近するのを拒否した。したがって、市民としての権利、とくに選挙権を要求するだけで満足した。このように宗教的・政治的理由でフランス女性が二つに分断されていた結果、フェミニズムの運動が弱体だったのである。

7．現代フランスのフェミニズム

二つの世界大戦に挟まれた時期、フランス社会全体が母性の役割を高く評価するようになる。戦争による大きな人命の損失、経済危機、戦争再発の恐れ、それらと国家による社会保障制度の発達が重なって、女性の権利要求運動が沈静化。女性が、伝統的だとしてはやしたてられた母親としての役割を受け容れ、その結果、共和主義者のフェミニストたちとカトリック女性との溝が狭ばまる。1920年、避妊に関するいっさいの宣伝を禁じ、妊娠中絶を犯罪と見なす法律が議会で可決した。その際、フェミニストたちが反対運動を組織することはなかった。

第二次世界大戦が始まってヴィシー政府が成立すると、「神・家族・祖国」のスローガンを掲げ、援助を増やすことによって女性をいっそう家庭の中に閉じ込めようと試みた。しかし、フランス女性から真の同意を取りつけるには至らなかった。というのは、それ以前に彼女たちが母親としての役割を受け容れたのも、他に選択の余地がなかったからだった。

終戦を迎え、女性の選挙権が実現するに及んで、女性たちの間に解放感が広がった。ところが、それも長続きしなかった。米国流のライフスタイルの輸入と相まって、専業主婦が「家庭の女王」などとおだてられ、若い女性が再び家庭の中に閉じ込められたからだ。

60年代に入ると、バカロレア（大学入学資格試験）に合格し、大学に通う女性の数が次第に増してくる。そうなると、「モダンホーム」が窮屈になりだし、母親としての使命を果すことをすべてに優先させる女性モデルに対し、若い女性たちが疑問を抱き始める。そこで新たにフェミニズムが頭を持ち上げる。ベティ・フリードマンが読まれ、アニー・エルノーの自伝が専業主婦の不満を広く世間に知らしめる。ちなみに、エルノーのこの書はフランスびいきの日本女性の間で大人気を博した。ボーヴォワールの『第二の性』が再び脚光を浴び、あちこちに議論の渦を巻き起こしたのは、この頃のことである。

周知のように、ボーヴォワールは作家となるために、母親となることを拒否した。彼女はいつも、この選択が自分にだけしか関わらない個人的なものであることを強調した。けれども、女性読者たちの受け止め方は一様ではなかった。自らの道を選択したボーヴォワールの勇気を讃える

読者がいるかと思うと、逆に女性としてのすべての条件を引き受けないのは卑怯だといって、彼女を非難する読者もいた。実をいってボーヴォワールは、何よりもまず男女同権の実現にこだわるフランス・フェミニズムの伝統を復活させ、ヴィシー政府とその母性第一主義に対する反動として、逆の方向に敢然と進んだのだった。

結び

完全な自立を選択し、女性の置かれていた境遇を鋭く分析してみせ、時代の最先端を突っ走ったボーヴォワール。日本女性が真にフランス女性に関心を抱き出したのは、このボーヴォワールの著書を読んだからだった。日本女性の反応もさまざまで、ボーヴォワールを無条件に讃えたり、あるいは彼女の理想主義と個人主義を非難したりした。いずれにしてもボーヴォワールは、女性が進むべき道を示した。フランス革命期のオランプ・ド・グージュや日本の平塚雷鳥がすでにほのめかしたものを現代的な言語で言い表し、女性は歴史の行動する主体となり得るし、また、そうなるべきだと訴えたのだ。

続いて70年代から日本女性は、急速に変化してアングロ・サクソンの国々に追いつこうとしていた古いヨーロッパのこの社会に関心を示し出した。日本女性がもっとも驚き、もっとも大きな関心を示したのは、家族の急激な変化、同棲の陳腐化、ゆるい形の結婚契約である「パックス」、離婚後の新しい家族形成に対してだった。そして現在は、以上の変化の結果として当然、出生率が伸び悩むはずなのに、逆にそれが再び上昇に転じたことに日本女性たちは注目している。

わずか一世代で、新しい男女関係の形が次々と現われ、しかも、それらが人びとから受け容れられている———。伝統的な結婚観が残っている国の女性にとって、このことは意外に思われる。実際、60年代のフランス映画に見られた自由奔放な解放された女性のイメージとは裏腹に、当時のフランス社会がどれほど行き詰っていたかを思うと、誰もが驚かずにはいられない。風俗の急激な変化を示す面白いエピソードを一つ挙げよう。故ドゴール大統領の夫人が国営テレビの女性キャスターを、ひざを丸出しにしたことを理由に番組から下ろさせたというエピソードが、これである。

より重大な問題である妊娠中絶と避妊についてはどうか。それらを禁じていた1920年制定の法律が完全に廃棄されるには、1974年のシモーヌ・ベイユ法の成立まで待たねばならない。妊娠中絶の合法化をめざすこの闘いは、他のどんなイデオロギー闘争よりも、階層と年令を問わずすべてのフランス女性を連帯させることに成功した。

結婚が後退する。結婚前の同棲が陳腐化し、性について自由に語ることが許される。もっと高い地位をねらう女性政治家が正式の結婚をしないまま何人も子どもを産んでも、平気でいられる。パリ市長が自分自身の同性愛を公表しても、スキャンダルにならない。このような風俗の重大な変化が私の世代に、そして一世代のうちに、次々と実現したのはなぜか、と日本女性からよく訊かれる。この疑問に対し、次のように答えることができるだろう。根本的に保守的な社会でいきなり革命が勃発し、新しいものがそこに導入されるというのがフランス史の特徴だからである、と。しかし、こうもいえるだろう。この風俗革命はいきなり起こったのではなく、実際は長い間、

入念に準備されたものである、と。裕福な家庭に育った、教養豊かな世代が1968年に突破口を開いたとき、不満の火種は幾世代も前からくすぶっていたとのだ、と。ちなみに、その火の粉は日本女性の上にも降りかかったといえなくもない。

日本のフェミニストたちはボーヴォワール・ショック以来、アングロ・サクソン・モデルと並んでフランス・モデルに関心を寄せるようになった。フランス社会の最近の大変化に目を見張り、このフランス・モデルを自らの思索の中にますます取り込もうとしている。アングロ・サクソンのフェミニストたちは、「ジェンダー・スタディーズ」の枠の中で男性と女性の相互補完的関係を強調しながら、両性の複雑な関係を分析しようと試みる。一方、フランスのフェミニストたちは、この試みをあまり評価せず、「ジェンダー」という言葉の使用自体に対しても抵抗感を抱いている。その理由は、フランス人が受けてきた教育にあると思われる。共和主義精神にもとづく公立学校で学んできたのは、フランス革命の人権宣言にうたわれた「人間存在の普遍的性格」という考え方である。「ジェンダー」という概念は、男性と女性のそれぞれの特殊性を考慮しない「人間存在の普遍的性格」という原理に抵触しているように思われる。フランスの歴史に興味を持つ日本女性が、女性解放をめぐるこのような国際的な規模の議論にいっそう積極的に参加し、問題の解決に貢献することを期待する。